

「新・古美術鑑賞」より

屏風



伝雪舟 秋冬山水図屏風
室町時代・15-16世紀
奈良県立美術館蔵

屏風は美術品である以前に、室内に立てて風を防ぎ、または仕切りや装飾に用いる家具として活用されてきました。表面は絵や書で飾られ、画面が二枚、四枚、六枚などの折りたたみ式になっています。人の身長を超える大きさのものが多く、その存在感ゆえに置かれた場の雰囲気には大きな影響を与えました。

掛軸

掛軸は、書画を表装して床の間や壁間に掛けて鑑賞するもので、飛鳥時代に中国から仏教の伝来と共に伝わったとされています。当初は神仏の姿など信仰対象が描かれたものが中心で、礼拝や儀礼のために用いられ、時を経て人物や山水、花鳥などさまざまなものが描かれるようになり、室内装飾において重要な役割をもちました。使わないときは巻いてコンパクトになり、気軽に掛け替えられ、時には何点も同時に掛けて組み合わせで鑑賞されました。

扇面

扇は、あおぐことで風をおこし、涼をとる道具として知られていますが、昔の人々は扇の上に小さなモノを載せて運んだり、和歌や詩を書き付けて気持ちを伝えたり、顔を隠すなど、あおぐだけでなく、日常生活のさまざまな場面で扇を活用してきました。

また、扇や扇形の画面を描いた絵のことを「扇面画」といい、それぞれの面に意匠や描絵を施しています。

浮世絵

浮世絵は江戸時代に流行した庶民的な日本絵画で、はじめは人々の享楽の場であった遊里と芝居町が画題となり、のちに風景や花鳥、戯画など、描かれる対象の幅も広がっていきました。主に木版画で作られたので、大量生産が可能で誰しもが入手しやすい身近な美術であり、情報伝達の重要なメディアでもありました。

代表的な作家として、喜多川歌麿・歌川広重・葛飾北斎などがいます。

(参考文献)

日本大百科全書（ニッポニカ）（ジャパナレッジ Lib）
デジタル大辞泉（ジャパナレッジ Lib）